

●食部・大阪が育んできた都市と胃袋の物語に、コロナ禍を乗り越えるヒントを探す。

大阪の胃袋

湯澤規子 Yuzawa Noriko
画 三宅増人

第5回

東洋一の台所を支える人びと——大阪中央卸売市場



はつぶやく。まだ大阪の町が寝静まっている頃、市場は威勢の良い怒号と喧騒とで、まるで大きな生きもののよう躍動していた。

喧騒と鼻唄

——天下の台所の賑わいとその歴史

早朝といっても、とつくに市場は眠りから覚めて動き出しており、トラックから降ろされると、休む間もなく朝の10時まで仕事が続いた。公設市場や商店街が大阪のおばちゃんでごった返す女の世界だとすれば、当時の中央卸売市場は男だらけの世界だった。

ピリッと張り詰めた緊張感の中に、「通られへんやないかい」「何やとー」と、トラックの駐車位置などをめぐるケンカが勃発するのは日常茶飯事。そうした喧騒の中、市場に設置されたスピーカーからは、当時、第三回レコード大賞を獲ったフランク永井の『君恋し』が大音量かつエンドレスでかかっていた。手をせわしなく動かしながら、『君恋し』を大声で歌う者あり、鼻唄あり。冷たい北風が吹き抜ける師走の早朝とは思えないほどの賑わいと熱気が、夜明けとともに始まる大阪の台所を準備する。

大阪は江戸時代には「天下の台所」、明治維新以降は「食い倒れの都」と目されてきただけあって、食料を扱う市場は大規模かつ複雑である。長い歴史を持つ在来市場と強力な問屋組織が発達したうえに、府県行政が関与した公営の小売市場としての「公設市場」が設置され、国が六大都市（東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸）の間屋集合卸売市場を対象に制定した「中央卸売市場法」によって、1931年には

大阪市中央卸売市場が誕生した。父が働いたのは、それから30年を経た、戦後の市場ということになる。

市場経済を支える袋貼りの内職

——在宅ワーク今昔

父が雇われていたのは松屋町に本店を構える「袋屋」が中央卸売市場に出していた支店だった。ビニール袋やプラスチック容器がまだ無い時代、食料品の梱包には紙袋が使われた。あらゆる大きさと種類の大量の袋を売り捌く店が中央卸売市場の中にあるというのは至極当然のことながら、言われなければ見落としていたかもしれない世界ではある。

そこに一歩踏み込んでみると、「その袋はいったい誰が作っていたのか」という新たな疑問がわいてくる。まだ袋貼りの機械が無い時代、その製造は大阪府下の数多の内職従事者が担っていた。大阪府立内職指導所が1956年に府下10か所、8000世帯を訪問して実施した内職の実態調査がある[＊]。これによると、全体の18%が内職に従事し、22%が内職を希望している世帯であり、当時の大阪では内職に関わる少なからぬ人びとがいたことがわかる。具体的な業務としては、和裁や洋裁、編み物のような技能作業がある一方、グリコのおまけ入れ、菓子の包装、ボタン付け、そして袋貼りなどの単純作業による内職が多く存在していた。

「グリコのおまけ入れ仕事が少なくなる6、7月には、マッチ箱のレッテル貼り、模造真珠の玉通し、袋貼りなどの仕事をよその斡旋所から受けて」いるという内職者の言葉からは、季節的繁閑がある仕事の流動性に左右されて、一人が複数、異なる内職に

漆黒の闇に浮かぶ光の船

「ワシはほんまに、東洋一やテ、思ってたで」。父の言葉に、私は一瞬耳を疑った。

以前上梓した、『胃袋の近代』（名古屋大学出版会）という一書の中で、私は大阪市の中央卸売市場を「東洋」と謳われた」と紹介し、その賑わいを描写したことがある。すると、それを読んだ父が、「ワシはほんまに、東洋一やテ、思ってたで」と、懐かしむようにつぶやいたのである。「お父さん、中央卸売市場のコト、知ってるの?」と返すと、「知ってるも何も、そこで働いてたがな」と言うではないか。あらためて聞いてみた話はこうである。

時は1961年頃、中学3年生の父は、冬休みに旅行に出かけるために、日銭を得られる場所を探していた。すると宇佐美君という同級生の一人から「ほんなら、朝一番の御堂筋線で本町駅へ行って、西南の角の交差点で待っとって」と言われたという。午前4時半、朝一番の電車で最寄りの駅を出ると、5時に本町駅に到着する。駅を出て、言われた通り、御堂筋の交差点の西南の角で待っていると、どこからともなくヘッドライトをつけた1台のトラックがやってきた。それとわかると父は荷台に乗せられた。この時点では、どこに連れて行かれるのか、どこで働くのか、全くわからなかったらしい。

まだ夜が明けない町をトラックは黙々と走っていく。しばらくして唐突に現れた景色に父は思わず息を呑んだ。漆黒の闇の中、電気が煌々と灯る光の塊が、まるで巨大な船のようにぶわっと目の前に現れたからである。それが、大阪市中央卸売市場だった。「なんとも言えん景色やったなあ」。遠い目をして父

従事していたことがわかる。内職者の圧倒的多数は家庭の主婦であった。その動機は「世帯収入不足」が70%、「暇があるため」が18%、「不時の支出を補うため」が9%と続く。

「袋貼り」内職の平均労働時間は1日約7時間、1月約22日間にのぼる。父が働いていた袋屋の袋は、こうした多くの内職者によって製造されていたのだろう。つまり、一見すると男性の世界であった東洋一の台所は、じつは膨大な女性たちの手労働によって支えられていたのである。

コロナ禍で現代版内職として在宅ワークが増加し、定着しつつある。今も昔も「市場経済」という台所事情を支える重要な基盤でありながら、「内職」が果たす役割と、家庭「内」ゆえに生じる複雑な事情や葛藤などは見落とされがちである。躍動する巨大市場の舞台裏に、「外職」と「内職」、男性と女性、正規と非正規など、経済社会を構成する様々なコントラストがあるという歴史と現状に、いま一度目を向けてみたいと思っている。

注

＊『大阪府における家庭内職従事状況実態調査報告』1957年、大阪府立内職指導所。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負。『7袋のポテトチップス——食べるを語る、胃袋の戦後史』（晶文社）や、『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか——人糞地理学とはじめ』（ちくま新書）など、食や排泄といった人間の根源的な生命行動から都市文化を論じた話題作を続々発表。